

ハンニバル ライジング

2007(平成19)年3月22日鑑賞(試写会・三番街シネマ)

★★★★



第7章

たまには変わった趣向で

監督=ピーター・ウェーバー/原作・脚本=トマス・ハリス『ハンニバル ライジング』(新潮文庫刊)/音楽=アイラン・エシュケリ、梅林茂/出演=ギャスパー・ウリエル/鞆剛/リス・エヴァンズ/ケヴィン・マクキッド/ドミニク・ウェスト/リチャード・ブレイク/スティーブン・ウォルターズ/アイバン・マレビック/ゴラン・コスティック/チャールズ・マックイグノン/リチャード・リーフ/インゲボルガ・ダクネイト/アロン・トーマス/ヘレナ・リア・タチョヴスカ(東宝東和配給/2006年イギリス、チェコ、フランス、イタリア合作映画/121分)

……あの名作『羊たちの沈黙』に続く第4作は、若き日のハンニバル・レクターを描き、ハンニバル誕生の謎を明らかにするという趣向。本来の注目点はアンソニー・ホプキンスのイメージが定着したハンニバルの若き日を演ずる俳優だが、私はそれ以上に中国の名花鞆剛コン・リーが魅力的な日本人女性として登場している点に注目！ 視覚的な面白さは後半の復讐劇の数々だが、本来のテーマである「人喰い」の謎解きと、ハンニバルの異常性格(?)の解明も忘れずに……。

今回も美人捜査官は封印……

ハンニバル・レクターを世界的に有名にしたのは、言うまでもなく『羊たちの沈黙』(91年)。これは、アカデミー賞作品賞・監督賞・主演男優賞・主演女優賞・脚色賞の主要5部門を独占した名作だが、ハンニバル・レクターと共に強く印象に残ったのが、FBIの訓練生クラリスであり、これを演じた若き日の(?)ジョディー・フォスター。第2作『ハンニバル』(01年)ではジュリアン・ムーアがクラリスを演じたが、ハンニバル博士と美人捜査官との知恵比べという構図は引き継がれていた。しかし第3作『レッド・ドラゴン』(02年)で、知恵比べしたのは男性捜査官のグレームだったから私は少し失望……。

そのラストシーンは、レクターに「美人のFBI捜査官が面会したいそうだ」と

伝えるものだったから、「第4作ではまた……」と期待できるものだった。そこで、私はその評論の最後に「どうせ無理してつないでいるのなら、是非次の第4作の構想を練ってもらいたいと思う。せっかくのハンニバル・レクターのキャラクターを生かさない手はないと思うから。そしてまた私としては、第4作には、是非また美人のFBI捜査官を登場させてほしいものだが……」と書いた（『シネマルーム3』231頁参照）のに、今回も美人捜査官が封印されたのは少し残念……。

「シリーズもの」のつくり方

『ハリー・ポッター』や『ロード・オブ・ザ・リング』のように最初からシリーズ化を予定している(?)のものもあるだろうが、シリーズものは第1作の人気にあやかって生まれることが多いはず……。全力投球した作品が認められ高い評価を受ければ、誰だってうれしいものだが、その興奮が収まった時点から第2作をイメージしていくのは、当然大変な作業。

もっとも、ハンニバル・レクターの場合はトマス・ハリスの原作があるから、第2作『ハンニバル』も第3作『レッド・ドラゴン』も基本的にそれを活用すればよかったが、32年の作家生活で著作がわずか5作しかないという「寡作」が評判の彼に、第4作の原作を書いてもらうのは大変だったのでは……。そこでやっと生まれたのがこの『ハンニバル ライジング』だが、トマス・ハリスはその原作のみならず脚本も書いたというから、かなりの思い入れ……。

ハンニバル「ライジング」とは……?

シリーズ第4作は、ハンニバル・レクターの幼少期と青年期に遡って、何とも興味深い彼のキャラクターのルーツを辿るもの。いわば、バットマンの出生の秘密に遡った『バットマン ビギンズ』(05年)（『シネマルーム8』127頁参照）や、潜入捜査官と潜入マフィアの青年時代に遡った『インファナル・アフェア～無間序曲～』(03年)（『シネマルーム5』336頁参照）と同じようなスタイルだ。もっとも、プレスシートには、「誕生」に「ライジング」とルビをふっているが、私が辞書で調べた限りでは、「ライジング」を誕生と日本語訳するのはかなりムリ筋……。最も近い訳語は、①（偉人などが）現れる、出現する、もしくは②（死

から)甦る、復活する、だろう。何か適切な日本語訳をつけなければ、「ライジング」だけでは日本人にはこの映画の狙いが少しわかりにくいのでは……?

舞台はリトアニア

リトアニアは東欧諸国の1つ。第2次世界大戦中はナチス・ドイツの侵略に翻弄され、大戦終了後は大国ソ連の圧政に苦しめられてきた国だ。幼少期のハンニバル(アーロン・トーマス)とその妹ミーシャ(ヘレナ・リア・タチョヴスカ)は、そんなリトアニアの名門貴族レクター家の子供だから、本来であれば両親と共にお城のようなお屋敷で幸せに暮せていたはず。しかし、ナチス・ドイツの敗北が間近になってきたことは、ソ連軍の進出により明らか。

両親は一時的に居城を捨て、小さな山小屋に避難することを決意したが、その隠れ家も、今、戦車を伴うナチス・ドイツの将兵により包囲されることに。ところが、そこに突如現れたのが、ソ連の急降下爆撃機。激しい戦闘が展開される中、ハンニバルとミーシャの両親にも銃弾が……。生き残ったハンニバルは幼い妹を守り、山小屋の中に隠れ住んだが……。

若き日のハンニバルを誰が……?

『バットマン ビギンズ』(05年)で若き日のバットマンを演じたのは、30kgも体重を減らして『マシニスト』(04年)に登場したクリスチャン・ベール。そんな病的な彼(?)が、今度は筋肉ムキムキマンに変身して登場したのには、誰もがビックリ……。まあ、「バットマン俳優は絶対〇〇」という定番がない(?)から、若き日のバットマンを誰が演じてても違和感がない。しかし、ハンニバル・レクターの場合は、前3作でアンソニー・ホプキンスのイメージが完全に定着しているから、その若き日を演ずるのは誰がやっても難しいはず。

したがって、そのキャスティングが注目されたが、白羽の矢が立ったのは、1984年にフランスで生まれたギヤスパール・ウリエル。彼は『アメリ』(01年)でのオドレイ・トトゥとの共演に続いて、『ロング・エンゲージメント』(04年)でも彼女の恋人役として登場し、フランスのセザール新人賞を受賞した俳優。しかし今私が『ロング・エンゲージメント』の評論(『シネマルーム7』280頁参照)

を読み返してみても、別段、彼の印象が残っていなかったことが明らか……。しかし、今回のクールでニヒルなハンニバル役は、結構ハマリ役かも……？

『ハンニバル』映画のテーマは「人喰い」……

プレスシートには、ハンニバル博士が1938年にリトアニアの伯爵家のお坊っちゃんとして生まれてからの経歴と主な出来事を詳細に紹介しているので、ハンニバル・レクターという人物に興味を持つ人は是非それを読んでもらいたい。『ハンニバル』の異常性を最も特徴づけるのは「人喰い」。『レッド・ドラゴン』（02年）では、冒頭の交響楽団の団員たちを招待した食事の席で、料理のうまさ、「この材料は何？」と聞く団員に対して、ハンニバルが「言えば食べられなくなるでしょう……」と謎めいたセリフを返すシーンが印象的だったが、『ハンニバル ライジング』では「人喰い」がハンニバルの特性（？）となった秘密が解き明かされていく。そして、それこそが『ハンニバル』映画最大のテーマ。

それは、隠れ住んでいた山小屋をグルータス（リス・エヴァンズ）たちドイツ軍の敗残兵によって占領された後、飢えに苦しむグルータスたちが物欲しげな顔で2人の子供たち、とりわけ妹のミーシャをじろじろと見始めたところからスタート。さて、グルータス達はミーシャたちに対してどんな仕打ちを……？

収容所で成長したハンニバルは……？

1945年、第2次世界大戦でナチス・ドイツが敗れた後、リトアニアはソ連の支配下に入った。そのためハンニバルが住んでいたお城はソ連に没収され、今は孤児たちの収容所になっていた。山小屋での出来事にショックを受けたハンニバルは、言葉を失うと共に記憶の一部も失っていた。そして、夜眠りにつくると必ず夢の中に現れてくるのがあの残忍なシーン。そのたびにハンニバルは奇声をあげてうめくため、管理者たちは持て余し気味。その上収容所でのハンニバルの態度は反抗的だったからケンカも絶えず、処罰も再三。

そんなハンニバルへの罰として、彼を物置に閉じ込めたのが管理者側の大チョンボ。勝手知ったる我が家だから、お城の内部を隅々まで知っているハンニバルは、これを契機として収容所からの脱出を決行！ 彼が目指したのは、両親が机

の引き出しの中に置いていった手紙の束でみた、パリに住む叔父の家……。

医学生ハンニバルの誕生だが……

パリのお城に住んでいた美しい日本人女性レディ・ムラサキコン・リー（鞆 俐）は、死亡した夫の親族であるハンニバルを温かく迎えてくれた。そして次第にハンニバルが刀や鎧そして絵画や料理に興味を示し、その道を極めていったのは、明らかにレディ・ムラサキの影響。そんな2人の様子を観ていると、私などはつい「血のつながっていないハンニバルとレディ・ムラサキとの男女の仲はどうなるの？」とグスの勘繰りをしてしまうが、その点は……？

孤児院に収容されていたお坊っちゃま育ちのハンニバルがいつどこでどんな基礎的勉強をしていたのかわからないが、レディ・ムラサキのお城で青年期を過ごしたハンニバルは、今や晴れて聖マリー医学校の奨学生として医学の道に進むことに……。もっとも、そんな彼の仕事が、解剖学の授業で使用する死体の準備だったところが面白い。ふつう医学生はそんな仕事を嫌がるものだが、なぜかハンニバルにはそれが向いていたらしい。しかしそれは一体なぜ……？ また前3作でハンニバルを演じたアンソニー・ホプキンスがあればほど知的で博学だったのは、この医学生の時の勉強のおかげ……。

復讐物語の注目点は……

この映画の後半は、剣道の道を極めた(?)ハンニバルによる、あの山小屋に集まっていたグルータスたちドイツ軍の敗残兵に対する復讐劇。したがって注目点は、それをどういう状況設定でどんな風に実行するかということ。いわば、藤田まこと演ずる中村主水一派による『必殺』シリーズのフランス版……？

まずハンニバルが血祭りにあげたのは、市場を訪れていたレディ・ムラサキに対して性的に侮辱する言葉を投げつけた肉屋の主人ポール（チャールズ・マックイグノン）。日本刀を自在に操ってポールを翻弄するハンニバルの姿はえらくカッコいいが、その殺し方は残忍そのもの。さらに一太刀で切り取った首のさらし方はまさに日本の戦国時代風……。

これが1人目の殺人となったハンニバルだが、これによって自分自身の本性に

目覚めたらしく(?)、以降彼は、喜びの表情を浮かべながら(?)次々と殺人を執行していくことに……。そのバラエティーに富んだ殺人方法は以下のとおりだから、その様子はしっかりとスクリーンで……。

①ドートリッヒ(リチャード・ブレイク)に対する、森の中での工夫に富んだ(?)絞首刑

②ミルコ(スティーブン・ウォルターズ)に対する、病院内の死体をつけてあるホルマリンプールでの窒息死

③コルナス(ケヴィン・マクキッド)に対しては、ナイフで喉を一刺し

④グルータスとの激闘の末に、レディ・ムラサキの「もうやめて」という声も聞かず、ナイフで胸を切り刻んでの殺人

そして⑤グランツ(アイバン・マレビック)に対する、次回作を予告するような思わせぶりの殺人……?

フランスの刑事は役立たず……?

映画後半の復讐劇の数々は、ハンニバルの異常性格(?)を浮かび上がらせることが主目的だから、ハンニバルとグルータスとの知恵比べや、フランスの刑事との知恵比べは多少手抜きになっても仕方がない……? したがって、次々と復讐を仕掛けてくるたった1人のハンニバルに対して、グルータスたちが持て余し気味になっているのは少し不自然。さっさと逆襲すれば、若き医学生1人を始末することぐらい簡単なのでは……?

またハンニバルが犯人ではないかとポピール警視(ドミニク・ウェスト)が疑うのは当然だが、見かけはカッコいい彼も刑事としては役立たずのよう……。だって、レディ・ムラサキのお城からポールの首が発見され、さらに凶器として使用されたと思われる刀まで置いてあるのだから、その刀を提出させて鑑定すれば犯人はすぐにわかり逮捕できるはず……。まあこれは、本来のこの映画のテーマや面白さとは無関係な、ちょっとしたイヤミにすぎないが……。

コン・リー 鞏 俐は今や世界的大スター……

日本でもやっと渡辺謙や役所広司がハリウッドスターとしての存在感を見せて

きたが、これは長年の努力の積み重ねがあつてこそ。その意味では、『バベル』(06年)でアカデミー賞助演女優賞にノミネートされて一躍注目を浴びた菊地凛子は、まずは2年目のジンクスに陥らないようにしたうえ、次々と作品に恵まれ飛躍していくことが必要。

そんな日本の状況に比べると、近代中国の成立(1949年)、文化大革命の終焉(1977年)を受けて、チェン・カイコー陳凱歌監督の『黄色い大地』(84年)がはじめて国際評価を受けたという中国の映画事情であるにもかかわらず、その後わずか20年余でチェン・カイコー陳凱歌、チャン・イーモウ張藝謀が世界的監督になり、コン・リー鞏俐、チャン・ツイイー章子怡が世界的大女優になっているのはすごい。

魅力的な新キャラに大満足!

『SAYURI』(05年)におけるコン・リー鞏俐は実に魅力的だったし、『マイアミ・バイス』(06年)における異色の演技もカッコ良かったが、本作でもその存在感は抜群。今回の彼女の役柄は、ハンニバルの叔父と結婚して、今はパリの城で暮している謎めいた日本人女性レディ・ムラサキ。ハンニバルと同様に家族を失い、心に深い傷を負った女性としてストーリー全般に絡んでくる重要な役だ。

特筆すべきは、叔父は既に死亡しているものの、彼女は祖国日本の雰囲気を実りの中にエキゾチックに伝えていること。日本式の鎧兜や刀剣の存在、ムラサキが嗜む日本式の茶道や華道、さらに音楽や絵、食事などの嗜好性は、否応なくハンニバルに影響を与えたはず……。 「人喰い」と言われたハンニバル最大の秘密は、この『ハンニバル ライジング』のエッセンスとなる物語だが、アンソニー・ホプキンスが演じた熟年期のハンニバルの知識・教養・芸術的センスなどに、このムラサキが与えた影響が大きいことは明らかだ。

このように『ハンニバル ライジング』では、美人のFBI捜査官に代わってムラサキが魅力的な女性として登場するから、大満足。もっとも、これだけ濃密に日本的な色彩を持ち込んでいる映画に、なぜ日本を代表する大女優が出演しない(できない)の……? ちなみに、中谷美紀では……? 小雪では……?

2007(平成19)年3月24日記